

## 編集後記

親鸞教学七五号をお送りいたします。本号も、発行が大変遅れましたことをお詫び申し上げます。

神戸教授には「本願の仏地」と題する論考をお寄せいただきました。先生は本論で、法然の課題が二尊教の仏道の顕揚にあったことをお示しになり、それは凡夫を否定超克して聖なる超越界へ向かおうとした仏道を転じ、釈尊を釈尊たらしめ、衆生を煩惱具足の身として荷負する本願の仏道を明らかにする仕事であったと確かめられます。中川講師には「二つの国―靖国問題をめぐって―」と題する論考を頂きました。国を求めて生きざるを得ない人間は、しかしながら「我執」によってその国を地獄餓鬼畜生としてしまう。そのような人間にいかにして本当に「共に生きる」世界が開かれるのかということについて、尋ねていただきました。また、本学会会員で、元大谷大学非常勤講師の籠弘信氏から、「善信」と「親鸞」―元久二年の改名について―と題する論考を寄稿していただいた。氏は、これまで一般的に「綽空」から「善

信」であったと解釈されている元久二年の改名の記述は、実は「親鸞」への改名だったのでないかとし、論を展開していただいた。今号ではその（上）を掲載させていただきます。また、山田恵文特別研修員からは「親鸞における「弥勒」の内実―『大経』対告衆弥勒を通して―」と題して、日頃の研究成果を発表していただいた。

一九九九年も終わり、二千年を迎えた。キリスト教もしくは西欧に基づく暦ではあるが、いわゆる二千年問題など、いつもとは違う不安な雰囲気の中の年明けであったように思われる。政治・経済・教育・医療など、すべての場面で人間の知恵が大きな壁にぶつかっている現在、二千年を迎えた喜びよりも、世の末を迎えるという不安のほうが、実感としては強い。今後、人間文明は、どのような信念のもとに、どのような方向性を保って進めばいいのか。現在唯一はっきりしていることは、「このままではいけない。」ということ、それだけである。

安田先生は本号の講義で、「人は自由だと言うが、迷っている者が自由を与えられると、かえって自由を持て余すので

す。」と言われる。そして「救われる必要のないほど救われている世界の中にあるながら、救われずに流転する。」のが人間であり、だからこそ人間が本来にあるべき世界に帰るには「自覚しかないのです。」と言われる。それは金子先生が、人間が本来によるべき初心、本心に今ここにありものとしていられる初心を、善財童子の求道心という視点で確かめられたことと通底するように思われる。

文明がもはや行き先を見失った現代にあって、本当によるべき智慧は何処にあるのか。混迷する未来を見据えて、人類の灯火となるのは唯一仏教である。これもまた、実感である。（文責 木越）